

## 海を照らす灯台のなかまたち ～山下灯台（やましたとうだい）～

山下灯台は、人名が灯台の名称となっている、全国的にみても非常に珍しい航路標識です。

由来となった山下亀三郎氏は、1867年（慶応3年）、伊予国宇和郡喜佐方村（現在の愛媛県宇和島市吉田町）の庄屋・山下家の7人兄弟の末子として生まれました。

1882年（明治15年）、宇和島の変則中学南予学校（現在の愛媛県立宇和島東高等学校）を中退して家出、京都で小学校の助教員を務めたり、東京の明治法律学校（現在の明治大学）に入ったりして勉学に励んだそうです。

22歳で明治法律学校を退学し、富士製紙株式会社に入社しますが長続きせず、職を転々としますが、なかなか上手くいきませんでした。

1903年（明治36年）に資金繰りに大変苦労しながら、2千トンの英国船を手に入れ、喜佐方丸と命名（故郷の村の名を付ける）して船主になります。

初めに横浜～上海航路に乗り出しますが、燃料代にも事欠いたりしていました。

この事態を救ったのは、喜佐方丸が日露戦争で徴用船に指定され、海軍に引き渡したことでした。

すぐに第二喜佐方丸も購入、これも海軍徴用船にするとともに、他社船で他社の貨物を運送する海運オペレーターを始め、やがては日本を代表する山下汽船株式会社に大成長して、日本海運業の伸展に大きく寄与します。

山下氏は、故郷に高等女学校を設立したり、吉田町立病院の建設費用を寄付するなど、郷土愛も深かったのですが、奥南運河（おくなうんが）の整備もその1つに数えられます。



【奥南運河と山下灯台】

奥南運河は、宇和島海上保安部管内にある3つの運河の中で最も歴史が古く、宇和島湾と法花津湾をショートカットする航路として、江戸時代初期の1626年（寛永3年）に着工しましたが、干潮時には通航できなかつたり、土砂の流入などで航行に支障が出ていたものを、1918年（大正7年）、山下氏の寄付金などにより改修工事が始まり、1927年（昭和2年）にようやく完成しました。

1974年（昭和49年）には、旧運輸省から開発保全航路に指定されました。

この運河は「山下運河」と呼ばれ、地元の人々に愛されています。



【運河と灯台】

山下灯台は、運河の北側入口を示す標識として、1950年（昭和25年）、旧北宇和郡奥南村により「山下灯柱」の名称で建設され、当時は木柱に不動灯を取付けただけの簡素な構造でした。

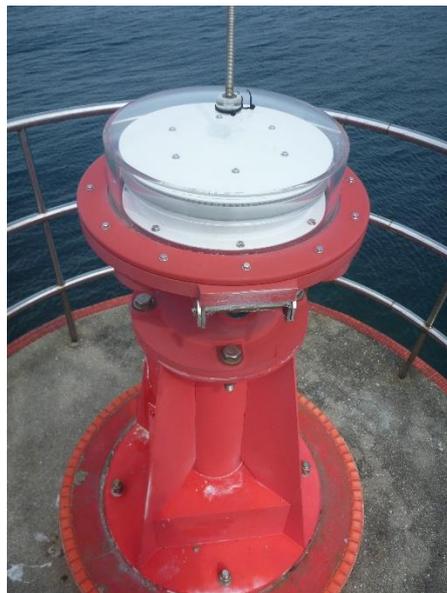
1952年（昭和27年）、航路標識法による公設移管で海上保安庁の所管となり、1953年（昭和28年）にはコンクリート造りに改修されて現在の姿となっています。



【灯台全景】



【灯台踊り場から運河を望む】



【LED灯器（Ⅱ型赤）】



【太陽電池装置】

○山下灯台要項

所在地	愛媛県宇和島市（大良島北端）		
塗色・構造	赤色、塔形（コンクリート造）		
灯質	単明暗赤光 明3秒暗1秒		
光達距離	4海里（約7.4km）		
高さ	地上から構造物の頂部まで	7.27m	
	平均水面上から灯火まで	9.91m	
	地上から灯火まで	7.20m	